



高野山霊宝館本館の中庭で咲き誇る石楠花（後方は放光閣）例年5月初旬から中旬にかけてが見頃

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第118号

平成27年5月9日発行
 和歌山県伊都郡高野町高野山306
 公益財団法人高野山文化財保存会
 高野山霊宝館
 電話0736-56-2029
 URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 開館時間	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
■ 休館日	年末年始のみ
■ 拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円
■ 専用駐車場あり	高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

春期企画展
「特集 一切経の世界」
 4月16日(土)～7月3日(日)
 5月18日(水) 開館記念日 無料開館
 (国際博物館の日協賛)

第118号 目次

春期企画展のご案内……………2～3

収蔵品の紹介92……………4

高野山の古建築第二十二回……………5

高野山の考古学(十)……………6～7

賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係(その三)……………8～9

高野山の文書(八)……………10

高野山霊宝館からのご案内……………11

霊宝館の庭園……………12

春期企画展

「特集 一切経の世界」

開催中 7月3日(日)まで

開催中の春期企画展では、一切経の特集展示をしています。一切経とは、仏教の経典を修成したもので、大蔵経とも呼びます。寺院にとつて非常に有用なものであるため、古来より繰り返し書写・開版されてきました。特に、日本では金や銀を使って贅をこらした一切経もつくられています。

春期企画展では、その代表的存在である平安時代の『紺紙金銀字交書一切経』『紺紙金字一切経』を中心に、中国や朝鮮半島で印刷され、日本にもたらされた『宋版一切経』『高麗版一切経』など四種の一切経を公開し、美しき経典の世界へ誘います。

主な展示品

書跡

- 国宝 大品経（紺紙金銀字交書一切経のうち） 金剛峯寺 ※前期
- 国宝 大方等大集経（紺紙金銀字交書一切経のうち） 金剛峯寺 ※後期
- 国宝 美福門院令旨（宝簡集二十五） 金剛峯寺
- 重文 放光般若波羅蜜経卷第九（光明皇后願経） 竜光院
- 重文 大般若波羅蜜多経卷第六十（紺紙金字一切経のうち） 金剛峯寺
- 重文 大方広仏華嚴経（紺紙金字一切経のうち） 金剛峯寺 ※前後期で入替
- 重文 仁王護国般若波羅蜜経（宋版一切経のうち） 金剛峯寺
- 重文 大般若波羅蜜多経（高麗版一切経のうち） 金剛峯寺

絵画

大日如来像（木村武山筆）

金剛峯寺



重文 大般若波羅蜜多経卷第六十（紺紙金字一切経のうち）

大般若波羅蜜多経卷第六十

三藏法師 玄奘奉 詔譯

初分講大乗品第十六之五

善現過去布施波羅蜜多過去布施波羅蜜
 多空未來布施波羅蜜多未來布施波羅蜜
 多空現在布施波羅蜜多現在布施波羅蜜
 多空過去淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜
 多過去淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜
 多空未來淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜
 未來淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多空



同時開催 特別公開 高山辰雄筆「投華－密教に入る」

日本画家^{たかやまたつお}高山辰雄が、平成11年に奉納した屏風。六曲一双の大きな画面に真言八祖（伝持の八祖）を並列したもの。向かって右から^{りゅうみょう}龍猛・^{りゅうち}龍智・^{こんごうち}金剛智・^{くわく}不空・^{ぜんむい}善無畏・^{いちぎょう}一行の六師を配する。さらに向かって左には、童子を連れた^{けいかあじり}恵果阿闍梨と、光輪内で結跏趺坐し智拳印を結ぶ^{しきみ}金剛界大日如来、両手で三昧耶印を結び、^{とうけとくぶつ}櫛の葉を落として投華得仏する空海を描く。制作決定から十六年の歳月を経て完成した傑作。



国宝 大品経卷第三十三（紺紙金銀字交書一切経のうち）※ 前期展示



重文 大般若波羅蜜多経卷第八十五（紺紙金字一切経のうち）※ 後期展示

※文化財の保存上、予告なしに展示品が変わる場合があります。

彫刻

厨子入仏舍利并諸尊像

金剛峯寺

工芸

重文 奥之院経蔵額（石田三成寄進）

金剛峯寺

金光明最勝王経曼荼羅図

浄菩提院

如来荒神像

成慶院

子島荒神像

宝城院

三宝大荒神像

北室院

雨宝童子像

五大院

青面金剛像

宝寿院

大勝金剛像

三宝院

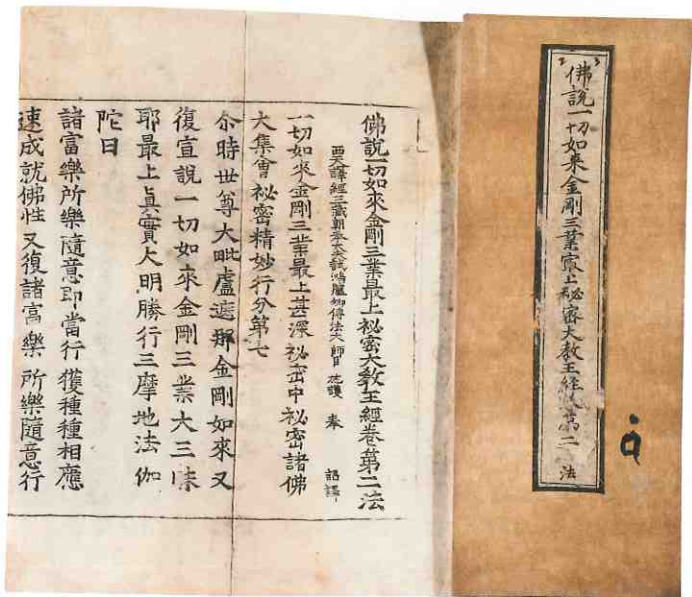
愛染曼荼羅図

西南院

如意輪観音菩薩・不動明王・愛染明王像

桜池院

収蔵品の紹介 92



昭和6年発行『高野山学志第二篇 高野山見存蔵経目録』より転載。
高麗版一切経が経蔵に収められていた頃の内部のようす



重文 奥院経蔵
(経蔵額は春期企画展にて展示)

重要文化財 高麗版一切経 六二八五帖

石田三成奉納 高麗時代（一二三世紀）

金剛峯寺蔵 版刷折本

紙高三一・五cm 横一一・四cm（折りたたんだ状態）

奥之院御廟にお参りすると、御廟を過ぎてすぐの東角に、お堂があるのをご存じでしょうか？重要文化財に指定されている「奥院経蔵」という建物です。経蔵とは名前の通り、中にお経が収められた建物で、今回紹介する高麗版一切経がこの中に収められていました（現在は霊宝館にて保管）。

「一切経」というのは『理趣経』『法華経』といった具体的な経典の名前ではなく、仏教の経典を集成したものの総称です。高野山の高麗版一切経は六二八五帖が現存していますが、そのうち六〇二七帖は版本（板木で印刷したもの）で、残りの二五八帖は写本（手書きで写したものです）。ちなみに「帖」という単位については、国宝の紺紙金銀字交書一切経（※）など、巻物の形状のものは「巻」、本経のように蛇腹状に折りたたんだ、折本の形状のものは「帖」と数えます。

高麗版一切経は名前の通り、高麗（朝鮮半島）において開版・印刷された一切経のことです。本一切経を印刷するのに使用された板木は十三世紀に制作されたもので、現在、韓

国の海印寺に保管され、世界文化遺産に登録されています。

本一切経の伝来については不明な点も多いですが、室町時代に対馬の宗氏が入手し、宝徳元年（一四四九）十一月に宗貞盛・成職父子によって対馬の八幡宮に奉納されたことが大般若経巻第一・十（※）に記された墨書によってわかります。その後、豊臣秀吉の重臣である石田三成（一五六〇〜一六〇〇）がこれを手に入れ、母の菩提を弔うために慶長四年（一五九九）に高野山に奉納しました。奥院経蔵はこの時に建立され、内部には文殊菩薩騎獅像（※）が祀られました。一切経という知識の宝庫を守護するのは智慧・智恵のほとけである文殊菩薩、ということでしょうか。六二八五帖の一切経は三〇六個もの箱に入れられ、経蔵内の回転する棚に収められました（写真参照）。

慶長四年といえは石田三成が関ヶ原の戦いで敗れ、亡くなる前年です。御廟のすぐそばに建立・奉納するところに当時の彼の力がどれだけ強大だったかをうかがえますが、翌年の己の運命は予感していたのか、あるいは全く想像さえしていなかったのかわかりません。

（福形安希子）
（※印は春期企画展で展示中）

連載

高野山の古建築

第二十二回 金剛峯寺壇上伽藍 西塔

鳴海 祥博



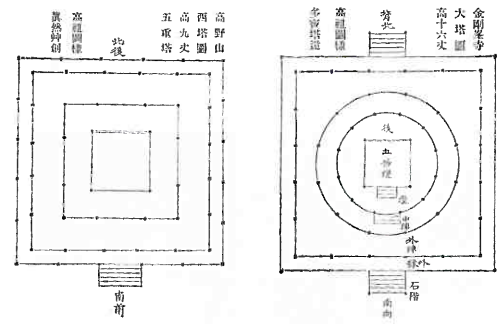
西塔の全景 木造二重の塔としては国内最大級の規模。一つ一つの部材が大きく、どっしりとして安定した姿です。



鎌倉時代の壇上伽藍の絵図 右に描かれた大きな二重の塔が根本大塔。左上の少し小さな塔が西塔。



西塔の内部 塔の外部は素木ですが、内部は漆や金箔、絵画、彩色で彩られ華やかです。中央に本尊の金剛界大日如来坐像が祀られています。



古記録にある大塔(右)と西塔(左)の平面図 内部の柱は、大塔は円形に、西塔は四角に配置されています。柱の配列は曼荼羅世界を象徴しているようです。

千二百年前、お大師様は高野山に「毘盧遮那法界体性の塔二基と、胎蔵界、金剛界の曼荼羅を建立する」と願いを立てられました。「毘盧遮那」は大日如来のことで、「法界体性」とは宇宙の本質を示す目印、という意味のようです。大日如来を中心とした胎蔵界

の中心部からその姿は見えませんが、ここだけは何か別世界のようです。西塔は二重の塔で、一階の平面は正方形、二階は円形です。一階の柱間は十四・三m、高さは屋根の上の「相輪」という輪を重ねた飾りの頂まで二十七m程あります。壇上伽藍の中心である根本大塔と同じ姿で、規模は大塔のほぼ三分の二程ですが、木造の二重の塔としては国内二番目の大きさで、木太く重厚などっしりとした塔です。

西塔の図には「高さ九丈(二十七m)、五重塔」とありますが、最初は五重塔だったのでしようか。とても興味のある問題ですが、真相は分かりません。その西塔が出来上がったのは、高野山開創から七十七年後の仁和三年(八八七)で、お大師様の後を継いだ甥の真然大徳の代でした。最初の西塔は正暦五年(九九四)

と金剛界の曼荼羅世界を象徴する姿を創り上げようと、二基の塔が計画されたのです。胎蔵界曼荼羅の塔が根本大塔、金剛界曼荼羅の塔が西塔です。西塔の本尊は金剛界大日如来坐像で、平安時代前期の作とされ、高野山では最も古い仏像です。『高野春秋編年輯録』という古記録に大塔と西塔の平面図が載せられています。それを見ると、大塔は内部には円形に柱が建っていますが、西塔は四角に柱が建っています。その形は現在も受け継がれています。この柱の配列の違いは、胎蔵界と金剛界の曼荼羅世界を象徴しているようです。

は世界で初めて全身麻酔を行った医聖華岡青洲です。青洲の名が何故ここに、と思うでしょう。良応は青洲の弟だったのです。青洲は医学を通して病苦を救い、弟の良応は西塔再建に衆生救済の願いを込めたのでしよう。ここにはそんな兄弟の足跡も人知れず残されていたのです。

西塔はその後三度焼失を繰り返し、現在の塔は寛永七年(一六三〇)の焼失から二百余年余りを経た天保五年(一八三四)に再建されたものです。西塔の北にある正智院の住職が西塔再建を発願して費用の全額を自力で調達し、着工から二〇年をかけて完成にこぎ着けたのが現在の西塔です。西塔の前に一対の石灯籠があります。そこに「正智院執事良応」「紀州上那賀郡名手莊華岡随賢」と刻まれています。良応は再建工事に携わった正智院のお坊さんで、随賢は世界で初めて全身麻酔を行った医聖華岡青洲です。青洲の名が何故ここに、と思うでしょう。良応は青洲の弟だったのです。青洲は医学を通して病苦を救い、弟の良応は西塔再建に衆生救済の願いを込めたのでしよう。ここにはそんな兄弟の足跡も人知れず残されていたのです。

納骨信仰の展開⑧

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

前回は戦国武将最古の供養塔を探
索し、その造塔が当時としては特異
な風景であったらうと述べまし
た。武将が墓作りの点で突出する存
在になった訳です。この傾向は江戸
時代に入ってより大きくなり、各地
の大名は競い合うように巨大な石塔
を奥之院に建立するようになりま
す。

手(北側)に造営されています。丘
陵の斜面裾近くを造成して、南北約
十六メートル、東西約八メートルの
平場を造り、十三基の五輪塔、一基

の宝塔形石塔、三基の石碑と一石五
輪塔などの小型石塔で構成されてい
ます。
この墓地の菩提所である遍照尊院

の境内整備事業に伴って墓所の整備
も立案され、昭和六二年(一九八六)
と六二年に石塔の解体修理と発掘調
査が実施され、翌六三年には報告書

しかし、これらの大名墓を解体修
理あるいは発掘調査した事例はきわ
めて少なく、報告書が刊行されてい
るのは、遍照尊院から刊行された津
軽家の墓所だけです。今回はその報
告書に導かれながら、奥之院におけ
る大名墓の構造を観てみましょう。

弘前藩主津軽家墓所の調査

奥之院へ向かう一の橋から御廟ま
での約一・五キロメートルの間には、
多数の大名墓が並んでいます。津
軽家墓所はその入口となる一の橋と
中の橋の中間地点付近で、参道の左



津軽家墓所(整備後)、手前左が寝髪塔



津軽家藩主室他石塔

賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係

(その4)

富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館

伏見 裕利

これまで、金剛三昧院客殿の発掘調査で出土した賢瓶中からオキノヤガラ鱗片葉(根茎は生薬「天麻」)が見つかったこと、『覚禅鈔』の地

鎮鎮壇法の記載から、賢瓶中には、五薬(牛黄、石菖蒲、天麻、人參、茯苓)を用いること、また五香として沈香や白檀を使用すること、さら

に五薬や沈香、白檀は、本草書の記載内容に「鬼」に関する記述があることを述べてきた。『覚禅鈔』の地鎮鎮壇法の中では、五薬と共に、名

香として、「安息(安息香)」を用いることが記載されている。今回は、地鎮鎮壇法で使用する生薬「安息香」について「鬼」との関係性を述べてみたい。



写真1 生薬「安息香」(備松栄堂より入手)



写真2 エゴノキの花 (Styracaceae) [武田薬品京都薬用植物園にて撮影]

「安息香」は、エゴノキ科 (Styracaceae) の *Styrax benzoin* Dryander 又はその他同属植物から得た樹脂とされる。市場では主に、「シヤム安息香(タイ安息香)」と「スマトラ安息香」の2種類が知られている(写真1)。色は赤色からオレンジ色で、甘い香りがするのが特徴である。安息香に含有される成分として、安息香酸やケイヒ酸、パニリンなどが知られており、いくつかの等級分けがされている。安息香を採取する方法は、この植物の樹幹に傷をつけて放置すると、傷をつけた部分から樹脂が分泌される。この樹脂を集めたものが安息香で、最終的に压榨成形した後に製品となっている。

る。日本でも同属植物のエゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. が生育する(写真2)。五〜六月ごろに下垂した白い花をつける。花の後に生じる果実の果皮には、エゴサポニンと呼ばれるサポニン成分を含有し、すりつぶすと石鹸様になる。以前はこれを洗濯に用いたり、また現在では使用は禁止であるが、魚を獲る場合にも使用していたことが知られている。

次に、安息香について、五葉と同様に各種本草書の記載内容と比較検討した。その結果、安息香は『新修本草』に、「安息香は味が辛・苦で、性が平、無毒」と初めて収載され(図1)、唐代に蕭炳が著した『四聲本草』では、「之を焼けば、鬼が去り、神が来る」と記されている。これまでに、五葉(霊宝館だより116号、9頁)で記したように、賢瓶中では、

先ず生薬「牛黄」で鬼を逐い、「石菖蒲」で鬼の気を下し、「天麻」で鬼精の物を殺す。さらに「人参」で鬼の蓋をする。この時、安息香は焼

いて用いるのであろうか。もし安息香を焼いて用いるのであるならば、「鬼が去り、神が来る」のを助けている。安息香の作用により、鬼から神になると、「人参」による鬼の蓋を通過することができる。さらに通過後に待っている「茯苓」は、魂を安んじ、神を養う。そして神を保ち、中を守る。茯苓の別名として茯神がある。このように、五葉それぞれの役割と相まって、「安息香」の作用が加わり、鬼から神への変身を助けている様が浮かび上がってきた。

なお、「鬼」の存在や考え方については、近畿大学の風岡顯良君より次のようなご意見を頂戴した。「日本及び中国に於ける地鎮祭乃至、台湾に於ける謝土などは、その土地の「鬼(き)」の気に対して、人間の為の建物を建てさせて下さいと頼んで、その土地の「鬼」に謝り、「鬼」の気を含む土地に建物を建てさせて貰おうと云う儀式であって、その土地にいる「鬼」を追い出そうという趣旨のものではないと云う事。また、「鬼」の意味するところは、魂の様なものであり、大事にすべきもので、是を大事にしないことによつて、様々な災害や、事件事故が起こると古代から明治時代ぐらいまではされていたと云う事。以上の事から、五葉は「鬼」への単なる御供え物と考

えるのが良い」ということである。「鬼」に関する考え方には、時代によつて、また土地によつて様々な考え方があり、一様ではないものと思われるが、今回、鬼を意識し、鬼の存在を大切にしていたことは明らかである。さらに、『覚禅鈔』の地鎮壇法では、地鎮の時に賢瓶と五色玉を埋めて、その土地を鎮めている。この時、大日真言と地天真言、そして甘露真言をもつて、五色玉と五穀粥を四方に埋めている。五穀粥は、地鎮及び鎮壇の両方で用いている。これは四方に存在する「鬼」を意識し、鬼へのお供え物として、鬼に対して敬意を払っているものと思われる。

今回、賢瓶の中から見つかったオニノヤガラ鱗片葉から、『覚禅鈔』の地鎮壇法では、五葉(牛黄、石菖蒲、天麻、人参、茯苓)及び、名香として安息香などを使用することを述べてきた。また各種本草書の記載から、「鬼」がキーワードになっていること、鬼は決して殺さないこと、五葉や安息香により、鬼から神への変身を導き、神となったものと長い間、うまく付き合っていく様が背景にあること、鬼から神へと導く一連の行為が、地鎮壇法の中でとり行われていること等を明らかにした。

ここで仏像の存在様式の中で、四

方の神々に踏みつぶされながらも建物を支える役目を担っている鬼たちを思い出す。鬼が仏教にふれることにより、建立した建物の四方の柱の下で、縁の下の方力持ちとして建物を支えているのであろうか。またそうであるならば、この背景の根底には、仏教における「不殺生戒」の教えがあるのだろうか。

最後に、今回、賢瓶に納入された不明品を鑑定する機会を与えていただいた財団法人京都市埋蔵文化財研究所の竜子正彦氏、ならびに株式会社松栄堂の畑 正高社長及び社員の皆様、大場みゆきさんに深謝する。

【参考文献】

菅原正明 『重要文化財高野山金剛三昧院客殿の発掘調査』 高野山金剛三昧院
 竜子正彦 『高野山金剛三昧院出土賢瓶の分析報告』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
 『覚禅鈔 地鎮壇法(大日本仏教全書49)』 仏書刊行会編纂
 難波恒雄 『和漢薬百科図鑑(Ⅱ)』 保育社
 武田時昌 『陰陽五行のサイエンス思想編』 京都大学人文科学研究所
 藪内佐斗司 『ほとけの履歴書』 NHKテレビテキスト趣味DO楽、4-5、2014
 太瑞知見 『お釈迦様の薬箱』 河出書房新社

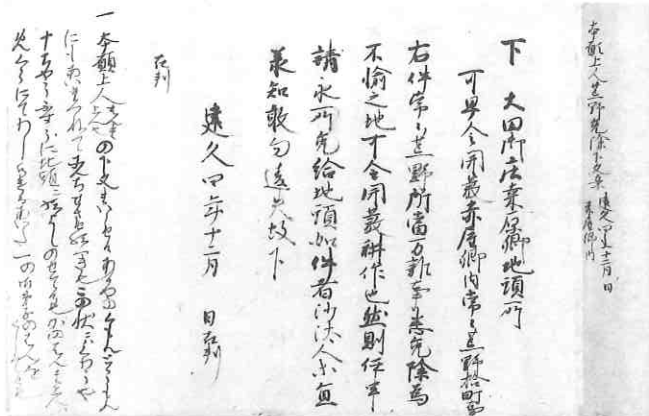


図1 『経史証類大観本草』における安息香の記載

高野山の文書 (八)

「僧鏝阿荒野免除下文案」に見る「鏝阿」の読み方

高野山に限らず文書の中には、歴史上有名な人物の名前が現れます。その名前は、漢字で書かれることが多く、名前の読み方が分かりにくい人もいます。皆さんがよく知っている人物にも本当は、違う読み方だったという人物がいます。霊宝館だよ



僧鏝阿荒野免除下文案

り百十七号でも触れた、高野山の僧侶鏝阿もその一人です。辞書などでは「ばんあ」「ばんな」と読まれることが多いですが、ある文書によって「ばんま」と読むことが分かっています。

鏝阿(？〜一二〇七)は、高野山の勸進僧として有名です。平安時代末期に、後白河法皇の許可を得て、備後国大田庄(現在の広島県世羅町の一部)を金剛峯寺根本大塔の領地として、長日不断金剛・胎藏両部大法を執り行い、国家安泰を祈りました。しかし、当時の大田庄は源平の争乱で荒れ果てていました。そこで、鏝阿は自ら大田庄に向き、大田庄を管理して立て直しました。その結果、大田庄は高野山の大きな財源の一つになりました。

鏝阿を「ばんま」と読むことが分かる文書は、国宝『又統宝簡集』一四二巻(金剛峯寺蔵)に所収の「僧鏝阿荒野免除下文案」という文書

です。下文とは、「下(ス)」で始まる上から下への命令文書で、「案」とあるのは、この文書が案文であることを示しています。案文とは、正文のコピーのことで、その中でも実質的な効力を持つものを言います。

例えば、訴訟の文書のコピーや土地の権利関係文書のコピーなどです。ちなみに効力を持たないものを写し言い、後の参考のためや研究のためなどにコピーしたものなどです。なお、案文の場合には、正文に書かれている花押は写されず「在判」と書くことで「正文には判花押がある」ことを示しています。

では、この文書で何を命令したのでしょうか。本文を要約すると、大田庄桑原郷地頭所に対して赤屋郷の荒野十町を開発すれば、税金を免除するから早く開発しなさい、という命令が書かれています。差出人は不明で、建久四年(一一九三)十二月に発給されています。

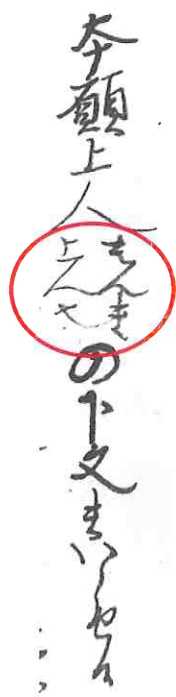
本文の後ろには、仮名まじり文が書かれています。一部抜粋すると以下の通りです。

本願上人(はんま上人也)の下文
まいらせ候。(中略)かのはんま
上人は、めくらにてわし候けるあ
いた、一の御弟子のはんをくして
候也。

この文から、「はんま上人」がこの下文を発給したことや、「はんま上人」は目が見えず、一番の弟子が花押を据えていたことが分かります。本文には、鏝阿の名前は現れませんが、しかし、建久元年(一一九〇)より、鏝阿が大田庄の経営を開始したことなどから、鏝阿が下文を出したのは明らかでしょう。つまり、「はんま上人」鏝阿であることがわかります。

日本語の「ん」には何種類かあって、特に舌先が口の上の方に付く「ん」の「ん」と、上唇と下唇がつく「m」の「ん」があります。鏝阿は、後者に該当すると考えられます。「ばんあ」という発音の「m」と「あ」が合体して「ばんま」と読んだのでしょう。

女性の書状などを除き、中世文書においては基本漢字を用いた擬漢文で書かれます。そのため、名前の読み方が確定しない人物もいます。しかし、鏝阿は今回紹介した文書によって名前の読みが確定する稀有な存在といえるでしょう。(研谷昌志)



僧鏝阿荒野免除下文案部分
(上人/まなま)
【者んま/とある。也】

高野山霊宝館からのご案内

◎触れられる「結縁大師像」を安置

この度、(株)大塚オーミ陶業様からご奉納いただきました「結縁大師像」を新館入口正面に安置しております。この大師像は、原型となる「木造 萬日大師像」(室町時代・金剛峯寺蔵)を精密に型取りし、陶製で精巧に製作されました。



結縁大師像

またこの像は、拝観者の皆様に「膝」に触れていただくことができ、「お大師さま」とご縁を結んでいただければ幸いです。(その他の身体の部分は触れることができません)

◎霊宝館友の会会員の募集

高野山霊宝館では、「友の会」の会員募集を行っております。

拝観時に会員証を受付窓口でご提示いただくと、会員本人のほか同伴

者3名様まで無料で入館できます。展示替えは年4回ありますので、博物館・美術館鑑賞がお好きな方には何度もご入館できますので大変お勧めです。

また霊宝館や高野山の文化財の情報を掲載した機関紙「霊宝館だより」を年4回(予定)お届けいたします。さらに、伽藍の御供所で会員証をご提示いただきますと金堂と大塔の内拝が無料となります。皆様のご入会をお待ちいたしております。

〈年会費〉

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

〈お問い合わせ先・申込先〉

高野山霊宝館 霊宝館友の会係

(電話0736-56-2029)

◎第37回高野山大宝蔵展

「高野山の名宝」

〔日時〕 7月9日(土)～10月3日(月)

午前8時30分～午後5時30分

(最終入館は午後5時まで)

〔場所〕 高野山霊宝館

〔主な出陳品〕

国宝 仏涅槃図 平安時代

国宝 紫紙金字金光明最勝王經 奈

良時代 竜光院

国宝 宝簡集(源義経書状) 平安時

代 金剛峯寺



仏涅槃図

重文 八字文殊曼荼羅図 鎌倉時代

重文 弁財天図 南北朝時代

重文 一字金輪曼荼羅 宝城院

重文 当麻曼荼羅縁起 鎌倉時代

重文 遍照光院

重文 清浄心院

(期間中展示替あり)

◎秋期企画展

「真田丸」の時代と高野山

〔日時〕 平成28年10月8日(土)～

平成29年1月15日(日)

〔場所〕 高野山霊宝館

〔主な出陳品〕

真田信繁(幸村)像 江戸時代

轡・付属鎖(真田昌幸所持) 江戸

時代 蓮華定院

太刀(真田幸村所持) 鎌倉～南北

朝時代 蓮華定院

武田二十四将図 江戸時代 成慶院

和歌山県指定 真田幸村書状 江戸時代

(予定・期間中展示替あり)

◎宝物貸出情報

NHK大河ドラマ特別展「真田丸」

○江戸東京博物館(東京都)

平成28年4月29日(金)～(祝)

6月19日(日)

○上田市立美術館(長野県)

平成28年7月2日(土)～8月21日(日)

○大阪歴史博物館(大阪府)

平成28年9月17日(土)～11月6日(日)

〔主な出陳品〕

真田幸村(信繁)像 江戸時代

真田信幸(昌幸)像 江戸時代

頭形兜(真田幸村所用) 江戸時代

蓮華定院

真田幸村書状 江戸時代 蓮華定院

豊臣秀吉像 江戸時代 蓮華定院

武田晴信像 江戸時代 持明院

武田勝頼・妻子像 江戸時代 持明院

持明院



頭形兜(真田幸村所用) 蓮華定院

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

キハダ・黄檗・黄肌・岐波太

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



羽状複葉の葉枝



幹の樹皮と内皮

キハダはミカン科・キハダ属の北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国の北部・東北部などに自生し、植栽もされている落葉高木です。このように広く分布するが、地方によつては山野の、どこにでもという樹ではなく、高野山山頂部では自生個体は確認されておらず、植えられ

たものは見(観)られます。この樹はアムールにも自生し、樹皮のコルク層が発達することから、「アムールのコルクの木」という意味の学名がつけられています。キハダには黄檗の字が慣用されているが、和名の由来は黄肌、内皮が鮮やかな黄色をしていること、古書

には岐波太の字でも登場します。別称には、おうばく(黄檗)、おうぼく・おうぎ(黄木)、にがき(苦木)、などが、方言名には、きわだ、だらすけ、にがき、へぎなどが。これらは内皮が黄色であること、薬用、内皮に強い苦みがあること、へぎは内皮を採るために樹皮を刃物などで剥ぎ取る(へぐ・へぎ)ことによるものと思われます。キハダ(黄檗)は、わが国でも古くから内皮を黄色染色料、薬用として用いられたといひます。高野山でも、麻(和名・アサ)、苧麻(和名・カラムシ)の内皮の纖維を原料として漉かれた麻紙、楮(和名・コウゾ)の内皮を原料として漉かれた楮紙をキハダ(黄檗)の内皮から抽出した染料で染めた黄紙に墨書された、国宝・重文に指定されているものをはじめ古写経、古典籍などが数多く所蔵されています。麻紙をキハダ(黄檗)で染めた紙を異説はあるが黄麻紙と書き呼び、

キハダで染めた黄紙を黄檗紙とも。わが国で奈良時代、平安時代に黄紙・黄檗紙が多用された理由については、キハダが黄色染料としては比較的入手し易かつたこと、紙への定着が良好であつたこと、墨書の滲み防止効果、発色があり、目にやさしく、墨書文字が読みやすいこと、当時は紙魚(小さな昆虫・ヤマトシミ)などによる食害・防虫効果もあると考えられていた。ということなどを教えていただきました。現在は防虫効果は期待できないというのが通説となっております。薬用としては、生薬でオウバク(黄柏)というキハダの内皮を主成分とする胃腸薬が高野山山上で製薬、販売されています。今年の四月十六日〜七月三日を会期とする、高野山霊宝館・企画展「特集一切経の世界」に展示の国宝「紺紙金銀字交書一切経」などの紺紙は藍(タデ科・アイ)で紺に染めた紙であると聞いています。